

## Jクラブに所属するユース選手における 進路決定プロセスに関する一考察

飯田 義明<sup>1)</sup>

### Study on the process of career decision-making processes of youth players in J-League Academy

Yoshiaki IIDA<sup>1)</sup>

#### はじめに

本稿の目的は、キャリア形成の初期段階といえるプロを目指すJクラブのユースに所属する選手(以下:ユース選手)からの聞き取り調査を行い、彼らの日常的実践を明らかにしつつ、進路を意識し決定していく時期・理由などのプロセスの仮説を生成するために検討することである。ただし、本稿においてはユース選手の日常的実践という視点を分析に組み込むことによって分析に厚みを持たせることを試みている<sup>(注1)</sup>。

イチローはリトルリーグを終えて高校への進学を決めるとき、父親と相談して高校野球の名門、愛知工業大学名電高等学校に進路を決定したとされる。このとき二つの道があったそうで、一つは受験高校を経て有名大学に進学する道。なぜなら「学問に集中すれば東大に入るのも夢ではない、と教師たちから太鼓判を押されたほど」であったからだ。もう一つは野球名門校へ進学しプロ選手を目指すことであった。しかし、イチローは悩むことなく野球名門校への進学を選択し、入学以後勉強をびたりとやめた。本人の言葉を借りれば「授業中は寝ていた」そうである。イチローは、「二

兎を追うものは一兎をも得ず」にならないように中学からの次の段階で勉強かスポーツ(=野球)かの岐路で常に、スポーツを選択し野球に専念することによって成功できたと言っている(亀山:2011)。幸い、プロとして成功しているため、この選択を肯定的に受け止められ語られている<sup>(注2)</sup>。このような成功者の陰には、プロになれなかったもの、プロ選手にはなることはできたが直ぐにこの世界を去らなければならなくなったものなどが数多く存在する。その者たちも次の職業を選択しキャリア形成を行っていかねばならないのである。

1993年に開幕したJリーグも約20年が経過しようとしており、それに伴い様々な問題が提起されている。プロ野球と同様に引退後のキャリア・トランジションに関する問題はスポーツ心理学、スポーツ社会学を中心に研究が蓄積されてきた<sup>(注3)</sup>。現役時代に活躍ができなかった場合、プロのスポーツ界において安定的に生活することには困難もつきまとう。2009年に(財)大崎企業スポーツ事業研究助成財団が発行しているトップアスリート対象の調査報告(以下:大崎報告)によると、高校時代に約6割強の選手たちが教員かプ

**Key words** : J-League youth players, Career decision-making processes, The practice of everyday life

**キーワード** : ユース選手、進路決定、日常生活実践

1) 専修大学社会体育研究所

Senshu University Health and Sports Sciences Institute

ロスポート選手を希望していると答えている（大崎報告：2009）。つまり、競技後の職業については漠然としか捉えていない状況が明らかにされている。この背景には、教育社会学などで指摘されているように進路形成空間としての学校の変容、教員（＝指導者）が「オンリーワン」としての個性を主張する子供たちに自由に選択をさせ、その道を支援というモデルに変容したことも影響しているとも考えられる<sup>(注4)</sup>。すなわち、選手を目指す子供たちは低年齢から自分の専門競技種目に特化することによって、それ以外のことを排除していく行動が、将来への負の側面を拡大している可能性もあり、一般社会への再社会化する際の基本的なスキルが構築されていない選手が存在していることを示しているといえる。さらに、我が国は学歴社会でありすなわち高校卒業でプロ選手と成りえても選手として成功せずに引退した場合、その後の転職（キャリア・トランジション）に対しても困難になる可能性がある（海老原：1991）。

プロ選手を目指してキャリアを形成していく過程に関しては、スポーツ社会学では「スポーツへの社会化」研究として蓄積されてきた（岡田：1983, 吉田：1998, 山本：1999）。また、高校における部活動スポーツ選手を対象とした進路決定する要因を分析した研究（岩島：1993, 吉田：1996）。近年では高校スポーツ選手の進路決定に教育学領域からのアプローチを取り入れた研究（甲斐：2000, 栗山：2012）などが進められてきた。これら、これまでの研究は学校と部活動という「スポーツ活動」と「学業」が同一の教育空間で行われていることを前提として研究が展開されてきている。しかし、Jリーグの理念を踏まえた各Jクラブは、プロ選手を自前で輩出することを目的とした一貫性を持った選手育成システムを構築してきた。その意味では、Jリーグを目指す子供たちには、今までのように高校生活における部活動としてサッカーと接するのではなく、高校生活とサッカーとの関係を切り離して捉えている。すなわち、学校生活（学業を向上させ学歴形成する）が選手たちにとって今まで以上に希薄になっている可能性があるのである。一方吉田らは、高校部活動選

手における進路選択について、プロを目指す可能性のある有望選手と指導者の関与のあり方という視点から検討している。これによると、指導者の関与の必要性は認めつつ、両者の関係性にある「権威—服従の人間関係」ないしは「選手の機械化の問題」に伴う指導者の一方的支配、すなわち両者の関係の非対称性における権力関係の問題性を指摘している（吉田：1996）。このような問題意識は、プロと大学進学の間で大いに揺れ動くことが予想される有望選手の進路選択におけるキャリア形成とも接続していくと考えられる。この問題は「教員と学生」から「コーチとユース選手（高校生年代、16 - 18歳）」という形に変形しただけであり、ユース選手にも同様に派生する切実な進路選択に関する問題を先取りした研究といえる。

上代は日本人のプロサッカー選手のキャリアプロセスを Role Exit Model を用いて横断的な研究をしているが、これも選手引退後のセカンドキャリアに着目したものである（上代：2009）。プロを目指すユース選手に関する研究では、上向・飯田らが日本におけるJリーグユース選手におけるキャリア形成とプロ志向に関して調査している。その結果によるとプロ志向に関しては、幼少から選手として高い評価を受けているユース選手ほどプロ志向が高く、競技にのめり込んでいることが明らかとされている（上向：2007）。また同様の方法を用いて飯田・上向らが韓国のユース選手を対象として報告している（飯田：2008）。一方で山田は、Schein, E.H. の組織内キャリア発展段階をスポーツ選手に応用し、アスリートのキャリア発展段階についての枠組みを提示している<sup>(注5)</sup>。それによると中学、高校時代を初期キャリアとして位置づけ、競技にとどまるのか学業を優先するのかの検討時期としている（山田：2007）。すなわち、この時期がプロを目指す選手たちにとって、キャリア形成における重要な分岐点ということになる。この枠組みに従うなら、ユース選手の進路選択に関する研究は、この年代が今後重要な意味を持つてくると考えられる。しかし、未だ学業との関係を含めプロ選手を目指すユース選手たちがどのような将来展望を描き、進路への意識を持っているかに

関する研究は十分に蓄積されてきていないのが現状である。

## 2. 調査方法および事例の概要

### 2-1. 対象者

本稿における対象者は、Jクラブに所属するZチームで寮生活を送っているユース年代の選手（9名）及び高校から大学へ進学した選手（5名）たちから聞き取り調査を行った。また選手以外にも指導者、寮長の2名にも同様にインタビューを行った。Zチームの選手たちは全員寮生活をしており、寮から自転車で10分ほどに位置するY高校に通っている。

聞き取りを行った際、多くの選手たちはパーソ

ナルデータに関して詳細に話してくれた。しかし、ここでは選手たちのパーソナルデータのうち、本稿における分析に必要と思われる項目のみをまとめた（表1）。以下に各項目について簡単に説明を記しておく。

「年齢」は聞き取り調査時の年齢である。「出身」は中学までの活動県であり、「クラブ/学校」については、中学時代のサッカー活動場所を記している。「最高のサッカー歴」は、個人で選抜されたサッカー歴について記した。「成績」に関しては上位をオール4以上、中位をオール3以上、下位をオール3以下で簡易的に記してある。また聞き取り調査時より時間が経過しているため、「高校卒業後」のキャリアについても追跡可能な範囲において記

表1. 調査対象のパーソナルデータ

対象者	年齢	出身	クラブ/学校	開始年齢	最高のサッカー歴	中学/高校成績	高校卒業後
A	22	県内	クラブ	8	中学/地区トレセン	中位/中位	大学進学→プロ選手→地域
B	19	県内	クラブ	7	中学/ナショナルトレセン	上位/上位	大学進学→就職
C	18	県外	クラブ	7	中学/ナショナルトレセン	下位/下位	高校→プロ選手→海外L
D	17	県外	クラブ	5	U-15/16選抜	上位/上位	大学進学→プロ選手
E	17	県外	クラブ	6	中学/ナショナルトレセン	中位/上位	大学進学→就職
F	16	県内	クラブ	7	中学/地区トレセン	中位/中位	大学進学→就職
H	18	県内	クラブ	6	中学/地区トレセン	上位/上位	高校→プロ選手
I	16	県内	クラブ	6	U-12/15選抜	上位/上位	大学進学
J	22	県内	クラブ	4	中学/ナショナルトレセン	上位/上位	大学進学→就職
K	18	県外	クラブ	10	中学/ナショナルトレセン	中位/中位	高校→プロ選手
L	20	県外	学校	4	県選抜(中学時代)	上位/上位(オール5)	大学進学→プロ選手→JFL
M	21	県内	クラブ	6	U-16選抜	中位/中位	大学進学→就職
N	21	県内	クラブ	5	中学/ナショナルトレセン	中位/上位	大学進学→プロ選手→海外L
O	18	県内	クラブ	7	中学/U-14,16候補	中位/上位	高校→プロ選手

した。

### 2-2. 調査方法

本稿のデータ収集については、対象クラブ（以下：Zクラブ）の寮に滞在し、寮で選手と生活を共にすることによって参与観察しつつ、食事や風呂の時のなどの会話から日常生活での情報を得た。それとは別に寮の会議室にて、主に深層的インタビュー（In-depth interview）を用いて、自由回答的（Open-ended）、かつ半構造的（Semi-structured）

インタビューにより実施した。インタビューは基本的に1対1で行われ、対象者本人の了解を得た上ですべてを録音した。各対象者に対しインタビュー時間は平均で40 - 60分であり、1、2回程度行った。また大学に進学した選手に対しても数名同様のインタビューを行った。寮への滞在日数は1回に4 - 5日程度であり、日常生活の観察も含め4回ほど行われた。また試合で東京に来た際にも行われた。データ収集期間は、2006-2008年の3年間であった。

## 2-3. 事例の概要

### Jクラブの概要

1938年に創部された前身の企業クラブとしての蹴球部は、長く全国屈指の強豪チームとして活躍してきた。その後、開催されるJFL(日本サッカーリーグ)では2部に降格するなど低迷する時期もあったが、日本を代表する企業クラブ(蹴球部)としての日本サッカー界に多大な影響を及ぼしてきた。1991年には正式にプロリーグ参加を表明し、1993年に開催されたJリーグに開幕当初から参加することとなる。Jリーグでも優勝する一方で、J2への転落を経験するなど、この20年間でも安定的に上位に位置しているクラブとはいえない。ユース育成については、「日本一の育成型クラブ」を目標の一つに掲げるなど育成には力を注いでいるクラブである。また近年では、下部組織からトップチームに上がって活躍する選手がJリーグのなかでも3位以内に入るなど、その成果は着実に表れているクラブである。クラブは全寮制を敷いており、X町にあるY高校で全員が自転車通っている。寮長がY学校でのPTA副会長を務め、生活態度は逐一報告を受けるなど学校生活についても責任を持って育成している。また高校の学校行事にも積極的に参加する一方、設立当初からサッカーフェスティバルなど町民とも積極的な交流を深め、地域に溶けこんだ生活者としての選手という意識付けなどもコーチ、寮長などが指導している。その結果から、近年ユースの全国大会で決勝に進出する際になどには、バスをチャーターし町民が応援に駆けつけたりもしている。

### X町におけるスポーツ振興及びY高校の概要

X町は、昭和28年(1953年)に〇〇県内で7番目の町として、人口14,500人、戸数3,000戸、面積84.34km<sup>2</sup>に発足した(平成15年段階では11,601名と減少)。X町は、県庁所在地から電車で2時間弱ほど内部に入った田舎町である。町のスポーツ政策に関しては、昭和50年5月(1975年)に入り町民の心身の健全な発達を願い、コミュニティ活動を通じて、スポーツ発展への物心両面にわたる援助を目的とするX町スポーツ振興会が結

成された。また9月には、敬老会の実施を町内4地区開催に切り替え、第1回の町老人スポーツ大会(220人参加)を10月19日に実施。さらに同年に子ども会の育成、スポーツ少年団の育成などの活動方針を確立する。昭和51年(1976年)には第1回X町民オリンピック大会を開催し、その毎年町民大会として定着させていく。昭和54年(1979年)には、X町体育協会とX町中央公民館共催による「町民ランニング(2Km)」を開催している。翌年には、スポーツ振興対策としてY中学校グラウンドに夜間照明を設置するとともに、健康増進と親睦融和を図り明朗で規律あるスポーツマンの養成を意図するゲートボール協会の結成など町民スポーツの振興を図る。昭和62年(1987年)には、バレーボールを通じて地域の連帯と健康づくりをめざすX町体育協会主催のバレーボール大会を実施する。平成2年度(1990年)には多目的スポーツ広場や体育館などのスポーツ施設、創作、陶芸室、野外ステージを備えるヘルシー&交流の里公園とする起工式を3月に挙行(総事業費約14億円、総面積約35,200m<sup>2</sup>)。以上のようにゲートボール、バレーボールを中心に町は積極的に様々なスポーツ振興を推進してきている。その意味に於いては、Jクラブを受け入れる素地はあったのかもしれない。翌年にはJクラブのユース選手12名がY高校に入学する。平成5年(1993年)のJリーグ開幕直前には、Jクラブの練習拠点とするための協定(9月)を念頭にして、サッカー公園事業を推進していくと同時にユース寮が開設される。1993年以降からは、Jクラブの練習拠点のための協定をもとに、現在に至るまでサッカー関連の施設においても拡充をし続けている。

Y高校は明治40年に農学校として創立された100年を超える歴史をもった公立高校の共学である。戦後の学制改革後の1949年に普通科、農業科、生活科の3学科からなる高校に再編された。その後の1963年に食品科が設置される。現在はさらに再編が繰り返され、普通科、アグリビジネス科、生活福祉科になっている。入学レベルは高くなく、現在の中学校からの偏差値は50以下である。すなわち、学科に拘らなければ余程でない限り中学



からの進学希望者が不合格になることはない下位校である。ユースの選手たちは昇格が決まったのち、Y高校の地元中学に3学期から転入する。これによって公立高校であるY高校を受験する資格を得ることにより進学することになる。

### 3. 聞き取りデータの分析から

#### - 選手の日常的実践と進路意識 -

Zクラブ全体で、2008年までの過去14期生(139名)まででプロ契約に至った選手は37名であり、大学サッカー部に進学した選手は93名、短大、専門学校への進学は2名であった。また進学せずに就職したユース選手は3名であった。その他、途中で退団した選手は4名であった。

今回の聞き取りを行った14名の選手たちの卒業後の進路についての結果は次のような3構成になっている。1) 高校(ユース)から直接プロ選手として契約できた選手は4名であった。ただし、出自クラブで契約した選手は2名であり、他の2名は他クラブと契約を行った。2) 高校から大学サッカー部に進学し、その後、プロ選手として契約に至った選手は4名であった。ただし、4名とも出自クラブと契約した選手はひとりもなく、全てが他のクラブであった。3) 大学進学したが、プロ選手になることができず一般社会人として就職したものが5名であった。最後の1名は、現在も大学に所属しており、大学リーグで活躍している。高校から就職した選手はひとりもいなかった。

#### 3-1. クラブの指導体制と選手の日常的実践について

ユース選手に対する指導体制として、総勢45名で1年生から3年生までの約30名前後を指導している。コーチングスタッフ(以下:スタッフ)は、監督1名、コーチ3名、トレーナー1名、寮長夫妻の7名で選手たちのトレーニング、日常生活を責任持って管理している。このZクラブの場合、全寮制を引いている関係上、スタッフはグラウンド場のみの指導ではなくある程度ユース選手の日常生活にも関与を持つようになっている。基本的にはスタッフは、寮に宿泊しているわけでは

ない。スタッフは朝練がある日には、前日から寮に宿泊するスタッフもいるが、早朝に寮にやってくるユース選手が学校に向かうと、午後の練習まで寮内にあるスタッフ室にて作業を行うことが一般的である。ミーティング、映像編集などの業務はそこで行われている。また、各コーチスタッフなども生活指導を行っているが、基本的には掃除、洗濯、挨拶などを含めた生活全般に関する指導は、寮長、寮母さんが行っている。食事などは専門の方々が3名程度、朝食、弁当(昼食)、夕食の賄いを行っている。各食事と入浴時間は決められており、また部屋は二人部屋になっており、別の学年と入室している。例えば、中学3年の秋、冬頃から転入してくる新人は、基本的には3年生と生活を共にする。それ以外を3年生や寮長、コーチなどと相談しながら、年間に春、秋の2回相手を変えながら生活を送ることとなる。

グラウンド以外での進路面での教育として、1ヶ月に1度ほどクラブスタッフが様々な業界で現在活躍されている方を講師として招き、講話を聞くようになっている。これは、ユース選手たちの社会への視野を広げさせることを目的としているということである<sup>(注6)</sup>。また、普段お世話になっている地域の方々との交流会なども年に数回開催されており、バーベキュー大会などを行い、地域へ溶け込めるようにユース選手の手助けをしている。それ以外に、親御さんとスタッフも交流会を持ち、相互の信頼関係を築く努力をしている。進路指導としては、スタッフが2年終了し、年度が替わる頃から進路面接などを行うようになる。これによって選手たちに進路を意識させるようになる。そして夏前後に親御さんを含めた三者面談を行うなど、進路に関してもスタッフが積極的に関与するようになっている。

「そうですね、やっぱりこのクラブは東京とか大阪のような大都市とは違って、どちらかというと地方にあるから、最後まで面倒みないとやっぱりね。結局選手が来てくれなくなっちゃうんですよ。(監督)」

上記の語りのように、Zクラブは海外のプロク

ラブのように毎年競争の中に選手を置き、伸びないと判断した選手を入れ替えるという方法を採用していない。監督によると、クラブによっては海外と同様の方式を採っているところもあるという。しかし、このクラブは親御さんから預かった選手たちを最後まで責任を持って送り出してやることを基本と考えている。そのため、高校3年生に関する進路に対する意識づけをきめ細かく行っている。このような考え方は、寮長などとも共有している。

「預かった以上ね、これをほっておくわけにはいかんだろうと。そういう話になるわけですよ。預かった以上ね。でも親というのは、非常に欲を・・・が多いよねって私言うんですよ。どの親にも私言うんですけど、親に向けて言うんです。まずサッカーが上手くて、プロにしてくださいって放り込むんですね。プロになりたいから来るわけです。しかしプロになれなかったら、有名な大学に入れてくださいって、親思ってるんですね。もしプロになれなかったら、いい大学へ世話して下さいって。で、嫉をしませんので、嫉をして下さいって親は思ってるんだよって私言うんですね。監督に（寮長）」

以下の語りなどからも、寮長を含むスタッフがどのように選手に目を向けているかが伺える。

「やっぱそれで、んー、昔うまかったのにみたいな、なんつか、中学校までやっぱ代表とかでちやほやされてきて、ユース入って、上手いかわなくてそういうのでやっぱ落ち込むやついるんですけど、やっぱそういうのもちゃんと監督とか寮長とか見てて、そういうものもちゃんと引き上げてくれるような指導をしてくれるんで、腐っていなくなるっていうのは全然ないですね。（L）」

次に選手たちの日常生活パターンについて簡単に記述する。ユース選手たちの活動範囲は決して広範囲ではない。寮を起点とする点対称として、高校まで約3km、練習場まで約3kmの全体で6km範囲内での活動が中心である。1週間の基本的な日常の生活は、殆ど全員が同じような行動パターンである。ほぼ毎週、土・日曜日に試合が行

われる。リーグ戦など県外に遠征に出かける場合は、土曜日から出かけ日曜日の遅くに帰寮することもある。そのため、1週間のうちで月曜日がオフになるのが一般的である。毎朝は、6時45分が起床となっており、7時には点呼が行われる。時期によっては、朝トレーニングが入っており、多くの場合は練習場までのランニング往復約6kmを走った後に、朝食を食べ、各自お弁当を持って学校へ向かう。その後、授業終了後15:30 - 40頃に帰寮し、練習場に向かい16:00-16:30頃から練習が開始される。約2時間強練習した後に帰寮し、各自風呂に入り夕食をとる。そして11:00の消灯までは各自各々の時間を過ごすことになる。ここでは、学校生活を除き選手たちのオフの日や寮での生活についての語りをみてみよう。

「そうっすね、でも月曜日のオフではまあ身体を休めるって感じの方が多いですかね。たまに日曜日とかそういうときは市内、あの〇〇市内とかに出で遊びに行ったりして、そういう時はリラックスって感じです。（K）」

「いやもう僕は結構寮で、もう結構くつろげて寮で気晴らして、気晴らしてもたまに〇〇<sup>(注7)</sup>とか、まあお好み<sup>(注8)</sup>でも食べに行ったりそんな感じです。（I）」

ユース選手の聞き取りから見える彼らの休日の過ごし方としては、この二人の語り方が代表的な語りである。多少の語り方の違いはあるが、基本的には〇〇市内に出るか、近所のお店に出向きゆっくり買い物をしたり、寮でゆっくりしたり、近所で学校の仲間と過ごしたりしているようである。ただし、学校の仲間と過ごすとき答えたものは2名であった。1週間のうち、まれではあるが土、日曜日の2日間のオフ日には市内に出向く選手が多く、1日のオフである場合は寮近辺でゆっくりしている。学校生活とトレーニングの繰り返しの日々を送っている彼らにとっては、オフというのはリラックスをメインにおいているようである。

次に彼らが寮生活についてどのように捉えていたのかである。

「良かった点はそうですね、やっぱり生活習慣がちゃんと  
してて、朝早く起きて飯ちゃんと食べて、ご飯もちゃんと出る。そういった部分では本当に良くて、はい。他には、あの寮長とかに言われる洗濯もんとか部屋の清掃とかそういうなんか人間的な生活してく中では本当に成長したなと思います。悪い点はまあ、(時間や規則に)縛られるってうか。(J)」

「うーん・・・まあ全体的にはすごい、環境はいいと思います。・・・もう、全然、間違ったこと言っていないので、寮長。怖いんですけど、ま、普通に生活してればまあ、なんとも言われないし。すごい自分らのために怒ってくれるんで。寮母さんも寮長もやっぱ。ありがたいですね。すごい怒ってくれるのはやっぱ。(O)」

また、試験前における寮における学習状況は以下のようになっているようである。

「そうっすね、普段やっている人は多分いなかったと思うんですけど、1週間前ぐらいからは、食堂に降りたり、ミーティングルームとかで何人かで集まって、教えあったりするような人たちもいたし、部屋に閉じこもって一人でずーっとやってる子もいました。(M)」

「やっぱ2年になって、3年生がそういう話しているの聞いてから、自分も来年、こういう時来るのかなあっていう。で、例えば3年生でもうあせっても、評定、次でこれだけ上げなきゃいけないっていう。今のうちに上げておけば、3年生で苦しまずに大丈夫かなあって感じで、今が大事ななって。(E)」

Mの語りは、試験前の寮の状況である。各々の状況に合わせて1週間前頃から試験勉強を始めている。ただし、Eが述べているように、彼らは先輩等の話から大学進学する際にある一定の評価基準に達しないとスポーツ推薦を受けられないことを理解しており、2年生時から試験勉強の必要性は理解しているようである。

### 3-2. 進路決定への経緯について

どのような意識を持って卒業後の進路を選択し

ていっているのかについて検討してみたい。

まずは、プロ選手に昇格することを選択した選手たちの語りを検討する。

「そうっすね、2年、1<sup>年</sup>は本当に伸びて、で2年の時は夏休みにサテライトにずっと練習行ってたときにユースに戻った時に本当に伸びたなあって帰って思ってた、3年の最初っすかね、前半は停滞、あんまり伸びてないかなって感じですよ、はい。・・・最初3年の最初はもう普通にあげられるんじゃないとか普通に自分でも思ってた、でその話(昇格ができない)を聞いたときは何であげられないのかちょっとわからなかったって感じです。(J)」

Jの場合、最終的には3年生の8月に自分のクラブのトップに昇格できないことを伝えられたが、他のクラブへの練習参加などを経てオファーを受けることによって、最終的には他のクラブのプロとして移籍昇格することとなった。関東の強豪大学からの誘いがあったが、彼の中では大学は3年の最初から考えておらず、プロを目指すために断っていた。ユース時代にサテライトに行くなどして2年時からプロのレベルを経験してくるによって、自分自身の中で昇格は当然のものとして捉えていたようで、進学は全く考えていなかったようである。

「なかったですね。これ、こうでしたね、自分は。本当に・・・じぶんのなかで、まあバカだからこう言うかもしれないですけど、なんか大学は、ここに何しに来たかっていうとプロになるために来たんですよ、自分は。で、ここ、こんなにいい環境でやってサッカーしかやることなく、でサッカーが遊びみたいな感じでやって、プロになるしかないだろうみたいな感じで、大学に行くのは、なんていうか逃げ道ってうか。・・・本当に、もう大学は逃げ道でプロは本当にやりたい、自分が成功するために行く場所みたいな感じで。だから大学行ったら自分が逃げてしまうんかなこの場からって思ったんで。やっぱりもうプロしかありません。(C)」

Cは学力があまり高くないこともあり、大学へ

の志向は全くといってないといえる。その反面、大学への進学は、自分の本来的目的からの逃避と捉えるなどプロ志向が非常に高いことが伺える。彼も2年生時にトップチームのキャンプに参加できたことによって、トップチームに上がることができる確率が高いと考え、より明確にプロ選手になれるとプラス思考で考えていたようである。

「やっぱ、まあ大学で4年間やるより、プロで4年間やった方がすごいやっぱキーパーのコーチがいる大学もそう多くないと思うし、でやっぱキーパーコーチがいるところで出来るならそういう方がいいと思いましたし、やっぱJ2なんかでやっぱ出場する機会が、まあJ1よりあるかなと思って、プロのほうに決めた感じです。プロになって、なんか通信で大学に行けるなんかあるらしいんで、それやりながら。(H)」

上記の三人のからは、2年時頃からトップチームに練習参加することによって、本人は昇格の可能性を意識していることが伺える。これは、上向らが指摘したように、「各育成年代での選抜歴が高い選手ほど、明確に職業像をプロ選手として明確に志向し、学年があがるほど強く上を目指す傾向があること」(上向：2007)とする見解と一致する。すなわち、2年生時頃からよりプロ昇格を意識することによって、逆説的に大学進学という意識が希薄化されているのかもしれない。最後のHはゴールキーパーという特殊なポジションであることから、大学への進学することは技術的な向上を目指すことが出来ないと捉えたことによって、プロへの進路を選択する。ただし、「学歴」獲得の重要性も理解しているようで、早稲田大学の通信制を受講し、デュアル・キャリア<sup>(注10)</sup>の獲得を視野に入れているようである。

次にプロへの進路を志向しつつ、最終的に大学進学した選手たちの語りを検討する。

「例えば自分はプロになりたいって志望は出しているんですけど、やっぱ大学のいい部分とか、まあ大学のこととかいろいろJ2のことでも色々話されているんで、プロ1つだけじゃないっていう考えがある、あるんでそれ

でちょっと。(D)」

彼は、トップのキャンプなどには参加していないが、その日だけの練習には参加している。またサテライトチームの遠征などには帯同したことがある。しかし、サテライトリーグの公式戦には参加したことがなく、あくまでも練習試合の参加経験のみである。そのため、本人自信もトップチームに昇格できるとは思っておらず、他のJ2のチームや大学なども視野にいれながら進路をスタッフや親に相談しながら決定している。ちなみに、本人はあくまでプロ志向であるが、親の意見としては、プロよりも大学進学を希望していた。ある意味、日本サッカー界の構造も中学から高校へ進学する段階で強豪高校へ進学するよりクラブのユースへ進路を選択することがサッカー界ではエリートである。そして、高校卒業後のレベルによってプロ(J1、J2、JFL、地域リーグ、大学リーグなど)を頂点とした序列が明確に形成されている。これは、竹内が日本の教育システムについて指摘した日本型能力主義選抜の特徴を描き出したメカニズム<sup>(注11)</sup>と同様な機能を果たしているのかもしれない(竹内：1995)。そのためユース選手たちは、メリトクラティックな競争から降りず、J1を目指すために、構造上の上位に位置する大学よりJ2へという選択を一時的にし(縮小：cooling-down)、そして再度J1を目指すことを考えていると思われるのである(再加熱：rewarming-up)。ただし、ここで問題となるのは、大学を選択することとJ2を選択することでは、「学歴」を獲得するという意味において、その後のキャリア形成に大きな格差が生じる可能性があると思われることである。すなわち、エリートのサッカー選手としてのキャリア形成においては、高校後からプロデビューすることが最高のキャリア形成である。そのため、大学に進学して「学歴」を獲得するということは、プレーヤーにとって結果的にサッカー界のエリートの階梯を下げることを意味することになる。しかし、一般社会におけるキャリア形成においては、大学へ進学し「学歴」を獲得することは重要な意味を持ちうる。それゆえ選手たちは、この捻れた構造のなかで将来に向け進路選択しなければならない



という問題性を孕んでいるのである。

さいごに、プロ志向でなく大学志向が高い4選手たちの語りから検討を加えてみたい。

「一応、なんか進路相談っていうのがあって、そのときには自分がどうするかみたいに聞かれて、一応サテライトの練習とかも呼ばれていたんですよ、で、だったんでプロにはなる。トップチームに上がるの目指すってことは言ったんですけど、そこまで自信あったわけじゃなくて、みんな大学とか調べたりしてたし、自分も結構調べて、で、J2に行くって道もあったんですけど、練習とか参加したりして、J2に行って、それですぐに出ればいいんですけど、出なくて、クビになっちゃったりとか、そういうもの考えたりして、で大学行って、勉強もしてサッカーもまだ続けたほうが、なんか社会に出て幅が広がるかなみたいな、気持ちの方がよかったですね。(M)」

「いやでもやっぱ入ってすぐにレベルが違うなって、ユースでも自分のレベルとは違うなっていうの感じたんで、プロって考える前にユースでどうしようっていうのが先だったんで。それに、やっぱプロが近くにありすぎたんで、逆にプロっていうのを普通の高校生があこがれるよりはやっぱ中身を知っているんで、プロに上がって潰れていく選手もいれば成功する選手もいるんで、そういうのを見てるんで、やっぱ普通のユースとか、そういうの知らない人からしたら、プロになりたいっていうのは言いがらかった。(L)」

「まだ、でもまだいけるかなと思ってましたけど、まあ8月になってみたら面接があるんですよ、契約するか契約しないかっていう、それで契約しないって言われて、でまあ、あんまそっからサッカーやる気なくて、特に何も決めてなかったんですけど、で監督が〇〇大学の監督と、先輩後輩で、それでなんか、〇〇があるみたいな感じで、って言われて大学行くの決めました。(A)」

「それはないですね。んー、そのときに、まあ俺高校の時の判断間違えたとは思ってないですし、サッカーだけの人生になるの嫌なんでそれをサッカーだけ考えると多分高卒でプロ行った方が良かったと思うんですけど、そ

れだけじゃないじゃないですか人生は、なんでまあ総合的に考えると絶対こっちの方がいいって自信もっていえるしマイナスになった面、あんまないと思いますけどね、自分としては。(N)」

まずMは、サテライトの練習などに呼ばれていたりしたが、自分自身に強くプロを志向していたとは思えない。なぜなら、最終的にプロへ昇格したCはかなり強くプロ志向を前面にだしながら方向性を決めていた。それとは対称的にMは、周囲の影響をかなり受けつつ方向性を決定しているように思われる。大崎報告にあるように「低年齢期から専門競技種目に特化し、日常の中においてもその練習などに多くの時間量が確保されることで、将来への希望の実現化が早まっているのではないか」と指摘している(大崎報告：2009)。しかし、Mは引退後の人生を考えた上で自分の社会性を広げるために大学への進路を選択している。ただし、この判断が本人の意志なのか、親や監督、もしくは周囲の仲間影響なのか、クラブで定期的で開催されている講話などから社会観を広く持つようになったからなのかは、ここでは判断が出来ない。次にLであるが、彼は高校からプロへ昇格した先輩たちをよく見ており、プロへの単純な憧憬はなかったようである。そのため選択も非常に現実的であるといえる。その一方、大学で活躍卒業後してプロ選手(J2)に成っている。さらにAであるが、彼も2年生の終わり頃からサテライトに呼ばれていた。昇格できるかどうかは疑心暗鬼であったが、本人は内心なんとか昇格できると考えていたようだが、結局昇格は叶わなかった。その後、気持ちを切り替えることができずプレーのパフォーマンスは低下したようだったが、監督との面談などを通じて大学進学することとなる。大学入学当初は、それほどプロへの拘りはなかったようだが4年間を通じて再度、プロ挑戦への意識をもちプロ選手(J2)に成ることとなる。さいごにNであるが、彼も他の3名と同様に2年生の終わり頃からサテライトなどに呼ばれていたが、当初からユースから直接プロへ行くことを念頭に置いていない。その意味では、自分の人生における

判断を信じて大学進学している。そして大学卒業後、プロ選手（J1）になっている。

これら以外に、トップチームへの昇格がほぼ困難であることを理解している選手たちは、先に記述したようにスポーツ推薦によって大学に進学できるレベルの成績をそれなりに取得し、その制度を利用しつつ大学に進学している。現在、高等学校の部活動の選手より、基本的に技術レベルはユース選手の能力の方が高いため、最終的には選り好みしなければ、全員がどこかの大学にスポーツ推薦によって入学できるのが現状である。

#### 4. まとめとして

本稿の目的は、キャリア形成の初期段階といえるユース選手からの聞き取り調査を行い、彼らの日常実践を明らかにしつつ、進路を意識し決定していく時期・理由などのプロセスの仮説を生成するために検討することである。

聞き取り調査の分析から、選手たちの進路選択の意識を形成するプロセスとして、1、2年生時ほどの程度トップチーム（サテライト）の合宿や練習に定期的に参加できるかにより、彼らはプロに昇格可能かどうかを判断の材料としている。そして、プロ昇格の可能性を探りながら大学への進学を考えていることが明らかになった。ただし、サテライトなどに呼ばれない選手はプロ昇格がないことを自覚しながら、また当初から大学進学を念頭においた選手たちは、学校でスポーツ推薦に必要な評定を獲得し、大学の練習会などに参加しながら進学先を検討していくこととなる。

これらから、選手たちの最終的進路決定には以下のような4つのタイプに分けることが可能であろう。

- 1) プロ志向を高く維持し自クラブへの昇格、または他クラブ、J2なども含めたプロを目指す選手。
- 2) プロを志向するも、昇格が困難でありスポーツ推薦で大学へ進学する選手。
- 3) プロ昇格の可能性を有しつつも、次の人生を考慮してスポーツ推薦で大学を選択する選手。
- 4) プロ昇格が困難なため、高校でスポーツ推薦に

必要な「評定（内申点）」を獲得し、スポーツ推薦で大学への進学をする選手。

また、上記のような進路選択決定のプロセスには、スタッフ、寮長、寮母さんなどクラブ関係者たちが関わっていることも明らかとなった。

彼らは、大半の時間をY高校、寮生活、トレーニング空間の3つで過ごしている。今回は、寮生活、指導者（トレーニング空間）を中心として時間的経緯から進路形成をいかに捉えていっているのかを仮説的に検討したに過ぎない。また、彼らの生活実践についても描ききったとは到底いえないだろう。今後の課題として、選手のY校における生活や教員との関係、親の進路に関する意識など今回取り上げていない要因との関係を明らかにし、更なる考察する必要があるだろう。

#### 付記

本稿は、平成22年度における専修大学研究助成「生涯スポーツ活動を通じた地域ネットワーク形成の可能性に関する検討」の一部を受けて行われた。

#### 脚注

- 1) 本稿のように選手たちの日常実践（具体的な内実）を組み込んだ研究として、高校生の部活動とそれを通じた進路形成に注目した研究（甲斐：2000）。フィリピンのマニラ貧困層で生活をしながらボクサーになっていく人々の身体文化をエスノグラフィックな記述から浮き彫りにした研究（石岡：2012）。また、下位のプロクラブで活動する職業としてのサッカー選手の生業を明らかにし、社会学における職業研究に位置づけるように試みた研究（Martin Roderick:2006）、地域スポーツ実践（サッカー）という身体活動の場を通してナショナルティとローカリティが形成されていく過程を日韓比較しながら明らかにしてきた研究（金：2009）などがある。本稿も方法論的には同様の問題意識を共有している。

- 2) このイチローの例もそうであるが、ジャーナリスによって流される表象は成功者であるスポーツ選手である。そのため学業のことは問題にされない。なぜなら職業としてのプロスポーツ選手にとっては学歴などが必要ない職業であるからである。ただし、成功するのは極一部の者であるにもかかわらず、全てのプロ選手を目指す子供たちの成功モデルとして機能している可能性がある。同様にサッカーでは、小野寺がプロとしてある程度成功した選手たちの15歳での選択について取材し記述しているが、殆どの選手は学業については触れていない。
- 3) スポーツ社会学に関しては海老原、甲斐、吉田、山本ら、スポーツ心理学などに研究は豊田、大場などを参照。
- 4) 荒川は「夢多い」型の進路指導による学校指導の帰結としてASUC職業を希望する学生が増加したことを実証的に明らかにしている。ASUC職業とは人気(Attractive)・希少(Scare)・学歴不問(UnCredentialed)の頭文字をとった荒川の造語である。また大和田によると、1970-1980年代では配分原理としては選抜・配分であり、生徒アイデンティティとしては「みんないっしょ」の一人という地位達成モデルであり、1990-2000年代からは、配分原理としての選択、生徒アイデンティティは「オンリーワン」としての個性への自己現実モデルに変容したと指摘している。
- 5) 組織内キャリア発展段階には9つの発展段階と、それぞれの発展段階で直面する問題及び具体的課題が示されている。それを援用しつつ、大学生アスリートに適用可能なモデルを提示し、それぞれの発展段階で起こりえるキャリア・トランジションをモデルに組み込み、アスリート・キャリア発展段階モデルを作成している。
- 6) ユースの方針として、年に何回か外部の講師などを招き講演を組み込んで行っている。この目的は、選手たちへの社会教育であり、社会性を高めさせ視野を広く持たせることである。例えば、記者、元代表選手(サッカー選手のみではなく)、車椅子の画家、会社代表、鍼灸師、大学教員など幅広い人材が講師を務めている。
- 7) ○○○とは、寮から1kmほどの距離にあり、学校と寮の間くらいに位置する大型スーパーである。彼らは学校終了後(15:30)、ただちに帰宅し練習後に着替えてグラウンドに向かう。練習開始は16:30のため、普段はお店によって買い物をすることはできない。そのため、月曜などの練習のオフの時などに立ち寄るようである。
- 8) 町にあるお好み焼き屋である。このお店の息子さんは、かつてY高校に通っておりユースの選手たちと仲が良かったことが縁で、その後、ユース選手たちが立ち入るようになっていっているお店である。お店を切り盛りしているのは母親であり、いまでもユースの選手を可愛がっており、東京などで開催される大きな大会などで決勝等に進出する際は、バスなどに乗って応援に行ったりしている。
- 9) サテライトとは、Jリーグのトップチームに出場出来なかった選手のためのチームであり、当時はサテライトリーグなどの試合が開催されていた。本来は契約されたプロ選手のためのリーグであるが、人数的なチーム事情及び高い能力を有するユース選手などを試すためにも利用されている。
- 10) デュアル・キャリアとはエリート競技者としてのアスリートライフ(パフォーマンスやトレーニング)に必要な環境を確保しながら、現役引退後の雇用に必要な教育や職業訓練を受け、将来に備えるという概念である。近年、イングランドではTASSという組織が、教育機関や国立スポーツ運営組織との間で政府の担保を得てパートナーシップを結び、才能のある若い選手をバックアップしている(<https://www.tass.gov.uk>)。日本にJリーグにおいても、JFAキャリアサポートセンターが引退後の方向性について様々な方策を選手たちに向けて発信している。しかしながら、この組織が対象にしているのは、あくまでJリーガーになってからのことであり、プロ選手を目指す子供たちを対象にしているものではない。

11) 竹内によると、日本社会は常に傾斜的選抜・配分システムおよび階層競争移動が作用することによって、メリトクラティックな競争から降りず「縮小-再加熱」を繰り返しながら成長していくことを、「冷却概念」を発展させた「縮小」、「冷却」、「再加熱」、「代替的加熱」という4つのモデルを提示しつつ、日本社会の独自性を説明した。

## 引用・参考文献

- 荒川 葉(2009):「夢追い」型進路形成の功罪, 東信堂.
- 飯田義明, 上向貫志ほか(2008): 韓国高校一流サッカー選手のキャリア形成過程とキャリア志向. 身体運動文化研究, 第13巻1号, pp.49-61.
- 石岡文昇(2012): 「ローカルボクサーと貧困世界 - マニラのボクシングジムにみる身体文化 - 」, 世界思想社.
- 岩島孝夫, 濱田幸二ほか(1993): 高校スポーツ選手の進路を決定する影響要因に関する研究 - テニス選手とバレーボール選手を対象として -, 鹿屋体育大学学術研究紀要, 10, pp. 35-41.
- 海老原修(1991): トップアスリートの光と影. 体育科教育, 41-1, pp. 27-31.
- 岡田猛, 山本教人(1983): スポーツと社会化論についての一考察 - Social Agent と Socialize の相互作用の観点から -, 体育・スポーツ社会学研究, 3, pp. 79-95.
- 豊田則成(2000): 競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化. 体育学研究, 45, pp. 315-332.
- 甲斐健人(2000): 「高校部活の文化社会学的研究」, 南窓社.
- 亀山佳明(2012): 「生成する身体社会学」引退論序説, 世界思想社, pp.133-134.
- 上代圭子(2009): 日本人プロサッカー選手のキャリアプロセスに関する横断的研究 - 非自主的な引退に着目して -, 体育社会学専門領域発表論文第20号, pp. 1-6.
- 金明美(2009): 「サッカーからみる日韓のナショナリティとローカリティ - 地域スポーツ実践の場への文化人類学的アプローチ - 」, お茶の水書房.
- 栗山靖弘(2012): スポーツ特待生の進路形成 - 高校球児の事例を通して -, 社会学ジャーナル, pp.167-183.
- Martin Roderick(2006): The Work of Professional Football - A labour of love? -, Routledge, London.
- 大和田直樹(2008): 広田照幸(編)「若者文化をどうみるか? - 日本社会の具体的変動の中に若者文化を定位する -」第3章 若者文化と学校空間 pp.102-112. アドバンテージサーバー.
- 竹内洋(1995): 「日本のメリトクラシー - 構造と心性 - 」, 東京大出版.
- 寺野典子(2008): 15歳の選択 - 僕らはこうしてJリーガーになった -, 河出書房新社.
- 上向貫志・飯田義明ほか(2007): Jリーグユース選手におけるキャリア形成過程とプロ志向に関する研究. 武蔵大学人文学会雑誌第39巻2号. pp.101-115.
- 山本教人, 吉田毅ほか(1999): スポーツ選手のリタイアメントに関する社会学的研究 - 調査結果の検討 -, 健康科学, 21, pp.29-39.
- 山田泰行(2007): 久宗周二, 水野基樹(編)「実践産業・組織心理学」第17章, 大学生アスリートのキャリア・トランジションとストレス. 創成社. pp.240-254.
- 吉田毅・倉田安治ほか(1996): 高校サッカー選手の進路選択に関する一考察 - 指導者の関与をめぐって -, 九州体育学研究 第10巻第1号.
- 財)大崎企業スポーツ事業研究助成財団(2009): スポーツ組織団体におけるトップアスリートのファーストキャリアとセカンドキャリアに関する実態調査. pp.17-18.